

星降る町の片隅で

星子 「あっ、もしもし？ ……良かった。繋がった」

星子 「今、時間いい？ ……ネットのニュース……見た？」

星子 「ねっ……なんか、びっくりだね。いきなりそんな事言われても……って感じで」

星子 「うん……うん……やっぱりそうだね。すぐには信じられないって言うか……」

星子 「あっ、でも……空見た？ もう見えるんだよ。黒い影みたいなのが……すごく小さいけど……」

星子 「なんか……あれがそうなんだって感じ。あれが落ちてくるんだって……しかもこの辺にだよ？ どんな確率なのよって感じだよね」

星子 「そうそう、絶対宝くじのほうの可能性高いよね！」

星子 「隕石が落ちてくるとか……その範囲にこの町が入ってるとか……そもそも隕石のサイズが日本よりも大きいとか……それが本当の情報なのよって感じ……」

星子 「あっ、隕石見えた？ 空にちよっただけ黒いのがあるでしょ。まだすごく距離が離れてるのに、もう肉眼で見えるのはそれだけ大きいからなんだって」

星子 「なんか……全然信じられないけど……でも、早かったら明日には落ちてくるって……」

星子 「はあ………なんか………なんだかなあって感じだよね」

星子 「えっ？ 私？ 逃げないよ………っていうか、今更逃げられないし……」

星子 「知らない？ 空港とか港とか大パニックになってるって……怪我人とかも出てるみたい……」

星子 「それに、都会のほうでは暴動が起きたりしてるって話もあるし、なんか……怖くて外に出られないんだよね」

星子 「そっちも？ 全然出てないんだ。学校が……先生達が逃げちゃって、授業ができなくなってから……もう4日くらいだっけ？」

星子 「巨大隕石が衝突するって話は、何ヶ月か前から出てたみたいけど……やっぱり、先生がいなくなったあたりから、本当にぶつかるんだって実感があったよね」

星子 「そうだよね。最初に情報が出たときは、ニュースとか馬鹿にした感じで伝えてたもんね。そんなのあるわけないって。今は落ちてくる前に破壊することができるんだって」

星子 「あの頃は、私もこんなことになるなんて思ってたな
かったなあ」

星子 「……ねえ、どのへんで信じた？ 隕石が落ちてく
るって話」

星子 「……あゝゝゝ、そのへんかあ。確かにあった
よね。政府は否定してるけど、専門家が肯定してた
りして話が食い違ってた時期」

星子 「あの時点で日本から逃げ出してる人もいたみたいだ
けど……そんなのできるの、お金持ってる人だけ
だったしね」

星子 「一週間くらい前だったっけ。衝突の可能性が極めて
高いって言い始めたの」

星子 「私さゝ、こういう時のためのミサイルとか開発して
て、それで撃ち落とせるって思ってたんだよね。…
…隕石が大きすぎて、全然効果なかったみたいだけ
ど」

星子 「でも、いきなり明日って言われてもね……ネットの
ニュースだから、どこまで本当かわからないけど…
…」

星子 「もう……どうしたらいいんだろうね」

星子 「ん？ なんで電話かけてきたのかって？ んゝ
ゝっ、どうしてるかなって思ったから」

星子 「えっ？ ゲームしてた？ あははっ、明日隕石が落ちてくるのに？」

星子 「まあ、そうだよな。いきなり生活変えたりできないもんね。逃げ道だってないんだし」

星子 「落ちてくるまで……このままなのかな……って……考えたりするんだよね」

星子 「……………あ、ゲームしてたってことは、要するに暇なんだよね？ 暇って言い方はおかしいのかもしれないけど」

星子 「それならさ……………ちょっと会わない？ ……そっ、直接。会って話さない？ 電話だっていつまで使えるかわかんないし」

星子 「いい？ じゃあ、どこにしようかな。待ち合わせ場所。……………あっ、そっちの家の近くに公園あったよね？ ちよっと高いところ。町が見下ろせる感じの」

星子 「うん、そう……………そこにしようか。見納めに……………なるかもしれないし……………」

星子 「30分後くらいで、いい？ ……じゃあ、そゆことで。また後でね」

星子 「あ、ちゃんと……………来てよね」

星子 「やつほ。お待たせ」

星子 「あゝっ、なんか久しぶり。学校やらなくなっ
てから、こうやって会う機会もなかったしね」

星子 「……元気、してた？ っていうのもおかしいかな。
病氣してたわけじゃないんだしね」

星子 「私？ 私もまあ……普通かな……普通に過ごすし
なかったし……」

星子 「んゝっ……ここの景色も久々。こっちに來た
ばかりの時は、結構ここにも來てただけど」

星子 「あゝあ、なんでこんなふうになっちゃったかなあ。
一週間前まで、普通に学校で授業受けてたのに……」

星子 「友達と将来なりたい職業とか、彼氏ができたらどう
したいとか、そんな話してたんだよ……」

星子 「事故とかで突然死んじやう可能性だってあるけど、
本当にこういう死に方するって思ってた
なあ」

星子 「ん……まあ、死ぬって決まったわけじゃないけど……
でも、この町ってわりと落下の中心地らしいし」

星子 「……隕石、はつきり見えるね。……あれが
落ちてくるんだね」

星子

「なんか………実感わかないなあ」

星子

「落ちてきたら……みんな死んじゃうんだよね……死ぬっていうか、たぶん跡形もなく消し飛ぶんだろうけど……」

星子

「ねっ、落ちてくるまで、どんなふうに通^とそうと思ってたの？」

星子

「……考えてなかった？ そうだよな。死ぬまでにしたいこととか、そこまで本気に考えたりしないもんね」

星子

「今から考えたって、やれること限られてるし」

星子

「でも………何もしないままっていうのもね……隕石が落ちてくるまで、やりたいことがないわけじゃないし……」

星子

「私？ あるよ。やりたいこと。………やりたいことっていうか……やり残したくないことっていうか……」

星子

「気になる？ そんなに大したことじゃないんだけどね」

星子

「ほんとに全然っ……大したことじゃないの。ただ、ちよっとね………ちよっと………」

星子

「告白、しとこうかなって感じで……………」

星子

「そっ、告白。愛の告白ってやつ。……………ふへっ、恥ずかしいでしょ」

星子

「……………で、こういう話をするとかわかつちやうと思
うけど……………なにその顔。変な顔し
ないでよ」

星子

「こほん……………突然だけど……………私もこういう感
じですとは思わなかったけど……………言っとかな
いと、隕石落ちてくるときに後悔しそうだから」

星子

「えろろと……………実は結構前から……………好きでし
た」

星子

「こういう時に言っても意味あるのかわかんないけど
……………ずっと、見てました。……………気付いてなかつ
たと思うけど。……………で、えと……………本当に……………本当に
こういうときに何言ってるんだろうって思うかもしれな
いけど……………っ、付き合ってください」

星子

「……………」

星子

「ん？ 今、うなずいた？ ………………ちよつと、
目えそらさないでよ。今っ……………うなずいたよね？」

星子

「えっ、どういう意味？ OKってことでいいの？
……………ねえっ、ちよつと！ ちゃんと返事して
よっ！ こっちは……………真剣なんだから……………」

星子 「……もしかして……………照れてる？ えーっ、ええーっ、照れた反応なの、それ！？ 普段クルな感じなのに！」

星子 「あ……………OKなの？ いいの？ OKってことは……………っ、付き合って……………くれるの？」

星子 「そっか……………いいんだ……………ふへへっ、あ、ヤバい。顔がにやけちゃう」

星子 「はあ……………っ、きんっちゃーしたあ！ ……ええ？ したよお、するに決まってるでしょ。こいつ、こんな時に何言ってるんだと言われるかもって思ってたし」

星子 「こんなときだけど……………やっぱり、受けてもらえたら嬉しいし……………」

星子 「ん、んふっ……………んへへっ……………うわーっ、彼氏だー。人生ギリギリで初彼氏ができちゃった！」

星子 「そっちも？ 初めてなの？ そっか……………ふへへっ、良かったじゃーん。彼女できたじゃーん」

星子 「ふふっ……………じゃあ、まあ……………あと一日くらいしかないみたいだけど……………宜しく願います」

星子 「あっ、早速だけど……………腕組んでもいい？ こ、恋人らしいことしたいし」

星子

「ん…………じゃあ……………」

星子

「こっち？ こっち側でいいんだっけ？」

星子

「こういう感じで……………いいんだよね？ ……
おーっ、彼氏と彼女っぽい。腕組んだの初めて」

星子

「ちよつとそのへん歩いてみない？ ……んつと……………
……商店街のほうとか。もうあんまり人がいないみたいだけど」

星子

「いい？ ……じゃあ、行こっか」

●人気のない商店街

星子

「…………誰もいないね」

星子

「お店も全部閉まってるし…………この辺の人達、みんな
逃げちゃったのかな？」

星子

「この辺、よく利用してたんだけど、最後にこんな光
景見ることになるとは思わなかったなあ」

星子

「どこかお店にはいれるかなって思ったけど、これ
じゃ無理だね」

星子

「あっ、ジュース買おうか。さすがに自販機は使える
だろうし」

星子

「えっ？ あ、奢ってくれるの？ えへっ、じゃあ
お言葉に甘えて……………」

星子 「んっ、何にしようかな？ ……………あっ、ミルク
ティーお願い」

星子 「ありがとう」

星子 「お茶なんだ。もしかすると、これが最後の飲み物か
もしれないのに」

星子 「あ、動きが止まった。あははっ、もしかして気付い
てなかった？」

星子 「まあ、自販機の飲み物なんだから、どれもそんなに
特別感があるわけじゃないけどね」

星子 「んっ…………んっ…………んっ…………んっ…………
…はあっ、おいし。こんなときでもおいし」

星子 「そっ、このミルクティー好きなの。たまにこの自販
機でも買ってたし」

星子 「なんて言うのかな…………甘いんだけどすっきりして
て、喉越しも良くて…………私、これが一番好きなん
だあ」

星子 「あっ、興味出てきた？ 飲んでみる？ たぶん飲み
やすいと思うけど…………」

星子 「えっ？ 口を付けたものだから…………？ あっ、そう
いうの気にするんだ？」

星子 「でも、ほら……もう彼氏と彼女になったんだし、別にいいんじゃないかなあ？ 私は……気にしないけど……」

星子 「あつ、嫌ならいいからね？ 無理に吞ませようとしてるわけじゃないから」

星子 「無理……してない？ ……それならいいけど」

星子 「じゃあ……うん、飲んでいいよ。はい、どうぞ」

星子 「……飲んだ？ 美味しでしょ……
……あと、間接キスだね」

星子 「あははははっ！ 照れた照れた！ こういうのに弱いんだね」

星子 「なんとなくね……そういう反応するんじゃないかって思っ……ぷぷぷっ、予想通り」

星子 「あつ、悔しそう……ふふっ、いい顔するね。……
……えっ？ 君のも飲んでいいの？ ほほう……
……そう……じゃあ、ちよっともらうね」

星子 「んっ……んっ……んっ……んっ……
……」

星子 「はあつ、お茶も美味しい……そして、私も
関節キスー」

星子 「んっ？ うん、そうだね。したね。間接キス。……私？ 私は平気〜」

星子 「ええっ？ 平気だってば……嘘なんかついてないって！ ……も〜っ、ついてないって言ってるでしょ！」

星子 「ちよっ！ そんな……ぷははっ、ぐいぐい顔近付けないで！ あ——も——」

星子 「平気………だけど……まあ、うん………ちよっ
と、だけ………ん、ふふっ………ちよっとなって言う
か………うん、意外と………は、恥ずかしいね」

星子 「あ、ダメ。なんかダメになってきた。顔にやけちゃう。………もっと大丈夫だと思ったんだけどなあ………ちよっ
と、あっち………あっち向いてて………こっ
ち見ないで」

星子 「やーだ！ やだやだっ、無理にそっち向かせないで！ 恥〜ず〜か〜し〜い〜！」

星子 「ん、ふふっ………こういうのって………いいね」

星子 「なんか夢みたい。………この商店街ね、よく友達と来たんだよね。その時は、彼氏と一緒に歩くななんて思ってもみなかった………」

星子 「うん、私、地方からこっちに来たから、しばらく買
い物は全部この辺だったの」

星子 「そうだよ。知らなかった？ こっちで一人で学生寮」

星子 「こっちの学校に合格して、寮に入って、だんだん慣れてきて……あっという間に一年が過ぎて……」

星子 「きっとこの調子で残りの時間も過ぎて、また受験だなんだって始まるんだろうなって思ってたんだけどなあ」

星子 「……………隕石、またちょっと大きくなった気がする。やっぱり近付いてるんだね」

星子 「えっ？ 実家に帰らなくていいのかって？ んー、結構遠いところだから、たぶんもう帰れないんだよね」

星子 「親もこっちに来ようとしたみたいだけど、まともに動いてる交通機関がなかったみたいで……」

星子 「ほんとにあと数日……もうちょっと早く決断してれば帰れたんだろうけど……」

星子 「うん、家族とはビデオ通話で話したりしてる。正直、それが救いだよね。そういうのがなかったら、顔も見られないし声も聞けないまま……最後を迎えることになってただろうし」

星子 「そっちは？ 実家暮らしなんだっけ？」

星子 「あ、そっか。お父さんとお母さん、お仕事で海外にいるんだよね」

星子 「隕石堕ちたらあっちの人たちはどうなるんだろうね。助かるのかな？」

星子 「そうだといいなって……ごめん。こんなこと言っても意味ないよね」

星子 「あ……鳥が飛んでる……この辺にいたら危ないよ」

星子 「……鳥って羽があるんだから、今からでもその気になれば、隕石の落ちて来ないところまで飛んでけるのかな？」

星子 「なんか、早く逃げてほしいよね。羽があるなら、まだ助かる道は残ってるんだろうし」

星子 「……ごめん。さっきから話題がちょっと湿っぽいよね。せっかくデートしてるんだから、もっと楽しく過さないと」

星子 「あれ？ あそこのお店………ドアが開いてるね。お店はやってないみたいだけど……」

星子 「ちょっと……覗いてみようか？」

●店内

星子 「あゝっ、商品が床に落ちたりしてるね。誰かが荒らしたのかな？」

星子 「うん、ブティックだよ。何度か利用したことあるの」

星子 「この服とか、ほしかったんだけど高くて手が出なかったんだよね」

星子 「着てみたら似合うかな？ ちょっと、体の前に当ててみて……………どう？」

星子 「似合う？ ホント？ えへへっ、そっか……………こういうの、本当に着たところ見せてあげたかったなあ」

星子 「これ？ うーん、確かにお店はもうやってないし、床に落ちてたんだからもらってもいいのかもしれないけど…………」

星子 「でも、やっぱやめとく。盗んだことになっちゃうし」

星子 「それにほら、奇跡が起こって隕石落ちて来ないかもしれないでしょ」

星子 「だから…………うん、生きてたら買いに来る。奮発する。今決めた！」

星子 「えっ？ 真面目？ そんな事ないと思うけど……でも、そう言ってもらえるのは嬉しいかな」

星子 「あっ、じゃあ君も何か着ようよ。………そう、生きてたら。隕石が落ちてこなかったら」

星子 「な～に～が～い～い～か～な～」

星子 「これなんか良さそうだけど……でも、ちょっと年齢と合わないかなあ」

星子 「あっ、あっちのがいいかな」

星子 「あ～っ、いいかも！」

星子 「ねっ、ねっ、これどうかな？ 似合うと思うんだけど………うん、いい感じ！ これでいいんじゃない？」

星子 「そっ、隕石が落ちてこなかったら、君はこれを買うこと。決まりね」

星子 「値段？ えっとね………高っ、26000円！
なんかのブランド物なの？」

星子 「ま……いっか。これを買うってことは、隕石が落ちてこなくて生きてたってことだし」

星子 「はい、約束。指切りね。……………そっ、指切り。子供みたいでしょ。えへへっ、たまにはいいかなって」

星子 「なーに恥ずかしがってんの。私達しかいないんだから。はい、小指出して」

星子 「ゆーびきーりげーんまーんうーそつーいたらはーりせーんぼーんのーます…………指切った!」

星子 「んふふっ、楽しみ〜。絶対似合うと思うんだよね」

星子 「うん、本気も本気。生きてたらまた2人で来ようね」

星子 「……………生きてられたら……………いいよね」

●人気のない商店街

星子 「さてと……………次はどこに行こっかな〜」

星子 「せっかくのデートなんだし、色々行かないともったいもんね」

星子 「あ……………ねっ、あれ……………隕石、さっきよりも大きくなってると思わない?」

星子 「気のせいかな? お店に入る前は、もっと小さかったような気がするけど……………」

星子 「……………本当に……………こっちに落ちてきてるんだね」

星子 「はあ………やめやめ。あんなの見てたって気分が暗くなっちゃうだけだし」

星子 「あつ、次はあっちのほう行こう。噴水があるでしょ。そこでしてみたいことあるんだ」

星子 「何かって？ ひーみーっ………行けばわかりまーす」

星子 「あつ、また腕組もっ」

星子 「さっ、しゅっぱーっ」

星子 「あつ、あそこあそこ。あの噴水のところがいいかな」

星子 「ん？ 何をつて？ んふふっ、もうちょっと秘密」

星子 「んっとね……このへんでいいかな。多少は絵になるし」

星子 「えーっ……こうやってせっかく付き合い始めたのに、時間がないわけでしょ。明日には終わっちゃうかもしれないし」

星子 「だから、ちょっと駆け足なんだけど……恋人らしいこと、色々してみたいわけですよ」

星子 「……で、まあこうやって噴水のあるところならいいかなって」

星子 「何を……って、この雰囲気でわかんない？ できれば察してほしいところなんだけど」

星子 「んー、まあいきなりだもんね。普通はわかんないか」

星子 「えー………ついさっき恋人同士になったばかりだけど、私達には時間がないでしょ」

星子 「だから、やれることはやっておきたいって言うか……経験しておきたいっていうか……」

星子 「恋人同士でしかできない事……色々あるでしょ？」

星子 「………わかった？ つまりはそういうこと、です」

星子 「普通に考えると早いんだけどね。この場合、仕方ないでしょ」

星子 「せっかく恋人ができたのに………何もないまま終わっちゃうのは………寂しいし………」

星子 「うん………キス、してみよっか」

星子 「………ちゅっ」

星子 「………しちゃった」

星子 「んふふっ、なんか……恥ずかしいね。けっこードキドキした」

星子 「あーっ、しちゃったー……ファーストキスだあ……
……こんな時でもやっぱり嬉しいね」

星子 「あ、だめだ。顔が緩む。ちょっとあっち向いてて」

星子 「だーめ！ 恥ずかしいから見ないでよ………もう……そっちだってニヤニヤしちゃって……」

星子 「そうだよ。すっごくニヤついてるんだから」

星子 「なーに？ キスして嬉しかったの？ けっこー顔に出るタイプなんだね」

星子 「ん、いいよ……その顔、可愛いし………それにね………」

星子 「（囁き）好き」

星子 「んっふっふっ……ドキツとした？ ごまかしたって仕方ないし、もう素直に全部言っちゃうよ」

星子 「好き……ずっと前から好きだった……告白したかったけど、そんな勇氣もなくて………でも、明日死んじゃうかもって思ったら、やっぱり伝えたいって思ってた……」

星子 「勇気を出して……告白して良かった……好きだって……大好きだって……伝えられて良かった」

星子 「………はいっ、恥ずかしい告白おしまい！ えーっと、次はどこいこっかな」

星子 「ちよっと待ってて。いい場所ないかスマホで検索してみるから」

星子 「この辺でどっかのんびり過」せるところは………は？」

星子 「えっ？ 待って。なにそれ？ ……4時間？」

星子 「あ……えっとね……今、ネットニュースに新しい情報が出たみたいんだけど………」

星子 「なんか………最初の計算が間違っ………隕石が落ちてくるまで、あと………4時間………」

★トラック2…あと4時間でできること

●主人公の部屋

星子 「お邪魔しまーす………へえーっ、こーゆー部屋なんだ」

星子 「ごめんね。急に行きたいなんて言っちゃって」

星子 「あ、そこ？ ベッドに座っていいの？」

星子

「毎日ここで寝てるんだ……」

星子

「けっこー綺麗にしてるんだね。男の子の部屋って
もつとこちゃごちゃしてるのかと思ってた」

星子

「あー、いいなー。自分の部屋にテレビ！ 寮生活だと、こんなに大きなテレビ無理だもんね」

星子

「うん、こっちに来てからあんまりテレビは見えてないかな。スマホで動画サイト使ってることが多いよ」

星子

「あ……ちよつと待っててね。さっきの……もう一度調べてみるから」

星子

「……やっぱり、隕石の落下、本当にあと4時間くらいみたい」

星子

「なんなんだろうね、いきなり。明日だって言ってたのにいきなり4時間後とか……どーしろって言うのよ」

星子

「原因？ なんか隕石が接近して正確な大きさがわかってきたから、それで落下時間を修正したんだって」

星子

「まあ、ネットのニュースだから、これもどこまで本当なのかわからないけど……」

星子

「でも……隕石、さっきよりもまた大きくなってるよね。どんどん近付いてきてるみたい」

星子 「あゝあ、今日は一日彼氏と遊べると思ったのに……
こんなことなら、もうちょっと早く告白しとけば良
かった」

星子 「……………って、凹んだって仕方ないよね。あと4時
間しかないなら、その4時間は大事に使わないと」

星子 「君のおかげでね……世の中がこんなふうになってて
も、今、けっこー笑えてるし」

星子 「ありがと。本当に君のおかげ……………ふへへっ、恥
ずかしー。こういうの恥ずかしー」

星子 「あーもー……………ほら、こっち来る。いつまでそんなと
ころに突っ立ってんの。もっと……………そばに来て
よ」

星子 「本当に……………君がいてくれて良かった」

星子 「朝はね……………ずっと部屋にしようかと思ってたの。実
家に帰れるわけじゃないし、テレビもまともにやっ
てないし……………」

星子 「でも、動画サイトもみんな隕石の話ばかりで、い
くつか見てたら気が滅入っちゃって……………」

星子 「そしたら、だんだん君のこと思い出して……………会いた
くなっちゃって……………」

星子 「あの時電話しなかったら、きっと今頃後悔してたと思う。自分の気持ちを伝えることもできなくて、私の人生これで終わりなんだって」

星子 「そしたら、たぶん部屋で一人で布団の中に入って……怖くて震えてたと思う」

星子 「今はね、本当に怖くないよ。……あ、ちょっとは怖いけど、一人じゃないから……」

星子 「最後は君と一緒になんだって……そう思ったら、怖いだけじゃなくて、ちょっと嬉しい気持ちもあって……」

星子 「だから……ありがと、ね」

星子 「あ……ごめん、ちょっと待ってて」

星子 「もしもし？ お母さん？ ……うん、見たよ。あと4時間なんだってね」

星子 「あっ、聞こえてる？ 電波の具合、ちょっと悪いのかな」

星子 「……あ、大丈夫みたい。今は聞こえてる。……うん……大丈夫だよ。元気にしてる」

星子 「今？ 今は……えっとね……もうこの際だから言っちゃうけど……さっき、彼氏ができたよ」

星子 「うん……………うん……………前から好きだった人。告白したの」

星子 「うん、だから1人じゃないよ。心配しないで。……うん、同じ学校の人」

星子 「うん、ありがと……………うん……………うん、そうだね。今……………ちよつと幸せ気分味わってる……………」

星子 「あ……………そう、だね。お母さんともたくさん話したいけど……………」

星子 「うん……………ごめんね。せつかく電話してくれたのに……………」

星子 「ううん、ありがと。電話してくれて。……………うん……………うん、お母さんも……………気を付けてね……………っていうのは変かもしれないけど」

星子 「そうだね。もしも……………もしも、隕石が落ちてこなかったら……………そっちに帰るね」

星子 「うん……………うん……………あつ、お父さん？ あ、うん……………今の話、聞いてた？ あ、2人とも聞こえてるの？ そっか」

星子 「……………うん、彼氏できたの……………ありがと……………お父さんも、お母さんのことお願いね……………うん、うん……………じゃあ……………また、ね……………」

星子

「あ、あのねっ……えと……2人とも聞こえてるかな？ あのね……私を、生んでくれてありがとう……今まで育ててくれてありがとう」

星子

「うん……ん……それじゃあ………
…ね」

星子

「……………はあゝゝっ」

星子

「ごめんね。お待たせ」

星子

「なんか………しんみりしちゃった。恥ずかしい会話聞かれたし……………」

星子

「彼氏ができたって言ったら……2人とも喜んでくれた。すごく驚いてたけど……良かったねって」

星子

「だからね……もしも………もしもだけど………隕石が落ちてこなかったら………うちに連れてきなさいって………あははっ、緊張する？」

星子

「……まあ、うちの親のことはこのくらいでいいから………あとは2人の時間を大切にしないとね」

星子

「あと4時間………も、ないのかな。……………ほら、窓の外見て。隕石、また大きくなってる」

星子

「……私ね、落ちてくるまでにできること………いっぱいしたいんだ」

星子

「ね……もう一度……キス、しようか」

星子

「……………ちゅっ」

星子

「ん、ふ……………ちゅっ……………ちゅっ……………」

星子

「ふ……………はあっ……………頭が……………ボーっとしてくる」

星子

「んふ、ふっ……………最初のより、ちょっと長いキスだったね」

星子

「……………次は、何しようか？ 時間は限られてるんだから、躊躇ってたらもったいないよね」

星子

「君は……………何かしたいこと、ある？」

星子

「……………ぶっ、顔に出てる」

星子

「出てるってば。今、チラッと胸見たでしょ？」

星子

「いーのいーの。正直になればいいんだから」

星子

「私もね……………その気持ち、わかるよ。だって興味はあるし」

星子

「本当はちゃんとしたお付き合いをして、お互いにかかって思えてからがいいんだろうけど……………そんな悠長な事言ってる余裕ないもんね」

星子 「せっかく恋人同士になったんだもん……………できる
こと…………全部しておきたいでしょ」

星子 「だから……………私は、いいよ？」

星子 「……………ぶっ、すっごい動揺してる」

星子 「別に無理にしないでいいよ？ 男の子だからって、
みんながみんなしたいわけじゃないだろうし」

星子 「……………あ、したいんだ。あははっ、そうだよね。
もうあんまり時間がないし……………お互いにそういう気
持ちがあるんだったら……………してみる？」

星子 「ん……………じゃあ……………えっと……………ど、どうし
よつか。自分から言っというてなんだけど、どうい
う流れにすればいいのかわかんないんだよね」

星子 「えと……………私は、初めてなんだけど……………あ、
君もなんだ。……………そっか、お互いに初めてなんだ
ね」

星子 「……………ねっ、どんな事をしたい？ この際だか
ら、全部言ってくれていいよ。できるだけ、希望を
叶えてあげたいし」

星子 「うん、だってもう4時間……………ううん、3時間くらい
しかないのかな？ やれることやらないともった
いなし」

星子

「あ、でも待って。いきなりガバッてこられると
ちよつと怖いから、こう……ゆっくりね？ ゆっく
り……優しく、してほしい」

星子

「それと、もっとキスがしたいかな。いっぱい……も
ういいよってくらい」

星子

「ん……ちゅっ……ちゅっ、ちゅっ……
ん、ふっ………」

星子

「……ちよつとだけ……口、開けて」

星子

「ん、れろっ……れろおっ、ふ……んん、れろっ、れ
ろっ、お……うぶ、う、んんっ……」

星子

「舌……絡めて、ほしい……れろっ、れろれろれ
ろっ……んん、ぶ、あっ……」

星子

「んう、ふっ……ふふっ……エッチなキス、しちゃっ
た」

星子

「恥ずかしくて死にそ……心臓ドキドキしてる」

星子

「ん……この続き、したいよね？ わかってる……し
よっか……」

星子

「うん……優しく……脱がせて……」

星子

「はあ……ちよつと失敗した……もっと可愛い下着付
けてきとけば良かった」

星子 「告白はするつもりだったけど、ここまでは予想してなかったから……」

星子 「冷静に考えればそうなんだけどね。告白して、上手くいって、でも残された時間は少なくて……だったら、こんなふうになってもおかしくないのにね」

星子 「はあーっ……恥ずかし……どこか変じゃないかな？
ああ、もうちょっとダイエットしとけば良かった」

星子 「んうーっ、そう言われても気になるんだもん。裸……見せる人ができるなんて思ってたから、完全に油断してる体だし」

星子 「ま、今更言っても仕方ないよね。ここまできたんだから覚悟決めなきゃ」

星子 「そういうわけで……はい、どうぞ。まだ下着が残ってるよ」

星子 「あ、ブラの外し方わかる？ ……そうそう、背中ホックになってるでしょ。それを外すの」

星子 「外れた？ うん……あとは……そのまま取ればいいから」

星子 「……ふ、ふふっ……ふふふっ、なんか、もう……恥ずかしくて笑っちゃう」

星子

「あーっ、ダメ、限界。おっぱい見ないで」

星子

「んふふっ、こうやって抱きついたら見えないでしょ」

星子

「見たい？　だめでーす。限界でーす」

星子

「（囁き）限界だけど……それでも見たかったら、強引に押し倒しちゃうところなんじゃないの？」

星子

「（囁き）時間もないんだし……男の子なんだし……たまには、力づくで……しちゃったら？」

星子

「ひゃっ！？　……ん、ふふっ……押し倒されちゃった」

星子

「こんなに腕もしっかり抑え付けられたら、もう抵抗できないね」

星子

「だから……あとは彼氏さんにお任せします」

★トラック3…初めてで最後かもしれないエッチ

星子

「えっ？　どんなふうに触ればよかった？　………ここまでやっておいて……そんなの好きなようにすればいいのに」

星子

「もう……優しいんだから……でも、本当にしたいようにしていいんだよ？　触りたいところ、あったら……触ったりとか……」

星子

「あっ………いきなり、おっぱいに………」

星子 「ううん、いいよ……そう……そうやって、いいから……優しく……揉んで……」

星子 「はあ……はあ……ん？ 大丈夫だよ。痛くないから」

星子 「力加減はね……もう少し強くてもいいかな……はあっ……ドキドキする」

星子 「ん……うん、ちょっと……気持ちいい」

星子 「こう、揉み方が優しいから……じわーっと気持ちいいのが染み込んでくる感じ……」

星子 「あ、イクとかそこまでじゃないけど……でも、焦らなくていいよ……まだ、十分時間はあるから……」

星子 「んあ、ふ……はあっ……ああ、ん……ん、ふふっ、すっごいモミモミされてる」

星子 「胸のサイズ……ど、どうかな？ そんなに小さくはないはずだけど……」

星子 「んんっ、ちょうどいい？ 本当に？ んあっ、ふ、はあっ、ああっ……本当は、もっと……大きいほうが良かったり、しないの？」

星子 「あ、んっ……んうっ……そう、なんだ……あ、ああっ……うん、手のひらで、包み込むみたいな、感じが……いいかも……」

星子 「ああ……気持ちいい……あ、んっ……気持ちいいけど……恥ずかしくて……ん、うっ、心臓、破裂しそう」

星子 「うん……そうやって……おっぱい、大きく回すみたいに、揉まれると……ん、あ、気持ち、いい」

星子 「はあっ、はあっ……あっ！ ……ん、なんでもない」

星子 「なんでもないって。本当になんでもないから。……んふ、うっ……ち、ちよっとだけ、気持ち良かった、だけ」

星子 「やだ、言わないでよ……ん、んうっ、こんなふうにされたら……乳首、勃つのは普通だよ」

星子 「あっ……それは……はあっ、ちよっ、待って……乳首集中は……やば、い」

星子 「ん、んふうっ……ふうっ……う、うん、やっぱりね、乳首は……はあっ、び、敏感だから……」

星子 「ああっ、指で、んんんっ、グリグリされると、あっ、ほんとに、やば、い……ふあっ、あっ、声、出ちゃう」

星子 「はああっ、すっご……気持ち、い………んふ、あっ………あ、ああっ………あああっ、乳首気持ちいい」

星子 「こんなに、か、感じるのは、あ、んっ、初めて……はあっ………はあっ………んあっ、なん、でえ………？」

星子 「普段は、あ、ここまでじゃ、ないんだけど………ん、んんうっ、く………」

星子 「えっ？ 普段………ああ、まあ、人並みにはするけど………もうっ、今はそんな話いいからっ！」

星子 「乳首、責められるの、んうっ、気持ちいいから………んはっ、もっと、続けてほしい」

星子 「はあっ………はああっ、ふっ………んあっ、ああっ………声、ん、あ、我慢できないけど………いい、よね？」

星子 「私達しか、はあっ、いないんだし………んう、ううっ………声、出しちゃうよ」

星子 「んふああっ、ああっ、もう、それ、良すぎっ………あ、ああ——っ、おっぱい、気持ちいいっ！」

星子 「あああ——っ、乳首っ………あ、んうっ、乳首、もっとして………あっ、それ、グリグリって、されるの………ああっ、気持ちいい」

星子 「なんで、そんなに……んうっ、じ、上手なの？ にくっ、初めてじゃ、ないの？」

星子 「ええっ？ 初めてなのに、あ……なんでこんな……
……ああっ、体が………熱い」

星子 「その動きも……んうっ、おっぱい………こねられるみたい、感じが………ふあっ、いい」

星子 「はあっ……はあっ……あ、でも……他にも、触りたいところあったら……いいからね」

星子 「んっ？ あははっ、なんか、気を遣って、おっぱいばかりしてくれてるのかなって思ったから」

星子 「触りたいから触ってるだけ？ それならいいけどんくううっ！！？ ちよっ！ ふ、ふひひっ、喋ってる間に乳首触らないで！」

星子 「あ、あーっ、指っ、指でつまんでグリグリはっ、あ、あああっ、それやばい！ ああっ、ちよっ、刺激、強すぎるっ、てばあ………！」

星子 「ひゃっ、ひやはははっ、なんか、わ、笑っちゃう！ あっ、ああああんっ、だからグリグリだけ、はあっ……あ、はあああっ、ん、気持ち、良すぎるんだってば………！」

星子 「はあっ、はあああっ、でも、ああ、なんか……だ、だんだん、それも良くなってきたかも………」

星子 「ああ、ああああ、くっ……すごく、感じるのに……
……ちよつと慣れてきて……んあつ、すつこ……気
持ち、いい」

星子 「人間の体って……ん、ふあつ、こうやって……あ、
んうっ……順応、していくんだねえ」

星子 「はあつ、はああつ……ねっ……ズボン、それ……
……膨らんでる、の？」

星子 「そうなんだ。大きく……んうっ、なってるんだ……
……なんか、良かった」

星子 「ふあつ、だって……ん、んんっ、反応してくれて
るって、こと、だし……ふあつ、勃たなかった
ら、んんっ、どうしようって、思ってたし……」

星子 「んふあつ！？ あ、ああつ、いきなりスピード、あ
げたら……あ、んんうっ、あ、ああーっ、それ、そ
れすごい。んんんうっ、乳首グリグリが、ああつ、
はや、い……！」

星子 「はあつ、はあつ、はああつ、ああああつ、気持ち、
いいよ、あつ、それ、しばらく、う、んんっ、っ、
続けて、ほしい」

星子 「すごく……んあつ、すごく気持ちいい……あ
あーっ、おっぱいで、こ、こんなに感じるの、
は、初めて……！」

星子 「ん、あ…………片手…………下に…………うん、
そっちも、触ってもいいよ」

星子 「んあっ！ ああっ、パンツの上から、こ、擦られる
と…………ああ、それも…………気持ち、いい」

星子 「はあっ…………はあっ…………そう、そんな感じ…………パ
ンツの上から、縦に擦られるのが…………ああ、いい」

星子 「スピードも…………んっ…………んっ…………そのくらいで……
あっ、今の感じが…………ちょうど良くて…………」

星子 「ん、ふふっ、本当に、初めてなの？ んっく、さっ
きから、あ、んんっ、乳首も、そっちも…………う、上
手いんですけど…………」

星子 「はあっ…………あああっ…………ワ、ワレメに沿って、擦ら
れるのに…………んうっ、気持ちいい」

星子 「あっ、その…………んっ、んっ…………今、ゆ、指が当
たってるところが…………一番、いい、かも…………」

星子 「んふ、うっ…………ふうっ…………ふう…………
あ…………っ、それ…………気持ち、いい、あっ……
…………」

星子 「うん…………そこ、が…………クリトリス、んんっ…………ふ、
ふふっ、気持ち良く、なってるから…………大きく、膨
らんできたかも…………」

星子 「ん、んううつ、あ、わかる？ パンツの上からでもわかるんだ？ ん、くくっ……！」

星子 「う、ま、待って、そこは……そこばかりは、あ、また……感じ、過ぎ、ちゃう……んくうつ……！」

星子 「んひゃっ！？ いきなり、乳首も再開しないで……んく、あっ……ふ、はああっ……！……！」

星子 「あああああああつ、それやばいいいいいいいつ、ち、乳首とクリ、んふっ、ううつ、ど、同時はああああ……！……！」

星子 「あ、はあっ……ふう、あつ、はあっ……はあつ、はあつ、はああつ……体、溶け、そ……く、ううつ……！……！」

星子 「ううつ、ううつううつ、待ってええええ……こ、このままされると……んくつ、イ、イっちゃやう、かも……！」

星子 「はあつ、はあつ……ちよつ、とお……なんか、あ、んあつ……イかせよう、と……して、ない？」

星子 「はあつ、はあああつ……やばい、本当に、い、これ……イ、イっちゃう、うう、ううつ……！……！」

星子 「ん、んふふっ、ちょっと、おおおっ、本気で、ん
ん、あっ、恥ずかしい、ん、ですけどお、あ、あ
あっ……!」

星子 「もう、ああっ、だめ、本気で恥ずかしいん、だつて
ば、あ……ふ、あっ……はあっ、はああっ……!」

星子 「あ……手が、あ、んっ、パンツの中、んんっ、入っ
てるん、ですけど……」

星子 「ん、んんんんんんっ! ここで、あ、ふあっ……
クリ、ち、直接、されたら……あ、あああっ、ヤバ
いってばあああ……!」

星子 「あ、んんうっ……濡れてるって……こんな、さ、さ
れたら、ああっ、当たり前だってば……!」

星子 「ふあっ、ああっ、あ、ああ――――
―――っ、それはっ、あっ、ぬるぬるを、ク、ク
リに塗るのはああああっ、は、反則っ……!」

星子 「あ、あ、あああっ、だめっ、それはっ、もう、もう
無理っ、それされたら、あ、ああああっ、げん、か
いっ……!」

星子 「んあっ、ヤバいって、い、言ってるのに……は
あっ、はああっ、こんなに速く、イっちゃう、なん
て……!」

星子

「ああっ、もうダメ……あ、はっ、はあっ、ああっ、
あああああっ、あああああああ——
——ッッ——
——!!——」

星子

「んはっ！ は、あっ、ふああっ、あああああ
あああっ……!!——」

星子

「ちよおおっと！ ストップ！ もうダメ！ 本当に
ダメ!!——」

星子

「んはっ……はあ——っ……はあ
——っ……はあ——っ……いった
ら……敏感に、なり過ぎるから……」

星子

「ごめんね。すぐイっちゃって……すごい気持
ち良かったから……」

星子

「そうだよ、気持ち良かったんだよ……びっ
くりしちゃった」

星子

「ん？ なーに？ なんでじっと見てんの？ ……
……なんか……やーだ、恥ずかしい」

星子

「もう、ほら……今度はこっちの番」

星子

「だって……これで終わりってわけにはいかないで
しょ。私、君になんにもしてないし」

星子 「それに、そんなに大きくしてるとこ見せられちゃったらね」

星子 「んしょっ……何がいい？ 何かある？ ……………だからほら、何かしてほしいこと」

星子 「私にできることなら……なんでもいいよ」

星子 「うん………何？ 何かある？ ……………口？ あーっ、口でするやつね。うん、わかるわかる」

星子 「ん……初めてだから上手くできるかどうかかわからないけど………いいよ、やってみる」

★トラック4…たくさんのことをしてあげたいから

星子 「えっと、私はこの辺でいいのかな？」

星子 「なんか……男の子の股の間に入るのって、変な感じ」

星子 「えっと、ズボンは……私が脱がせていいのかな？」

星子 「いい？ じゃあ………脱がせるよ」

星子 「うっわ！？ え……えええ————
っ！！？ なにそれ！？ こんなに………大きいものなの？」

星子 「ええ………ぼ、勃起？ これ、勃起してこの大きさよね？ 今から勃起するんじゃないよね！？」

星子 「そう……そうだよね……び、びっくりしたあ……ここからもっと大きくなるのかと思った」

星子 「へえーっ、これが……おちんちなんだ……こんなにすごいんだ……生のおちんちん見たの初めて……」

星子 「わっ、血管浮き出てる……すごいたましい」

星子 「えっ？ 男の子ってみんなこうなの？ みんな……こんなにたましいの？」

星子 「比べたことがないからわからない……って、そうだよね。そんな、ねえ……友達と比べる機会なんてないよね」

星子 「なんか……ふ、ふふっ……笑っちゃう……えっ？ んーっ、自分でもよくわかんないけど、笑うしかない感じで……」

星子 「へえーっ、おちんちんってこうなってるんだあ……なんか……カッコイイね」

星子 「うん、カッコイイ感じがする。変かもしれないけど……カッコイイ感じがするよ」

星子 「さ、触ってもいい？ ……いいの？ じゃあ……あ、どのくらいの強さで握ったらいいのかな？」

星子 「……軽く？　じゃあ、まずは軽く……………」、このくらい？」

星子 「このくらいで…………どう？　だ、大丈夫？　痛くない？　……………こんなに熱いんだ」

星子 「わくわく、手の中でビクビクしてる……………なにこの……………生きてるって感じ……………」

星子 「えっと…………口、だよね？　ちょっと…………心の準備があるから、それまで手でしててもいい？」

星子 「…………ありがと。じゃあ、まずは……………こんな感じで…………しゅっしゅって……………」

星子 「ええええっ、こんなに硬いんだ。反対側までそり返ってるし……………想像してたのと全然違う」

星子 「えっ？　本とか？　そんなの持ってないよ。……………インターネットで？　いやええっ、調べたことないし……………調べようとも思わなかったし……………」

星子 「だから……………今、けっこうドキドキだよ。男の子のおちんちん、触ってるんだし……………」

星子 「あ……………それで、これって気持ちいいの？　力加減とか、スピードとか……………もう少しこうしてっていうのがあったら、言ってくれていいからね」

星子 「んっ…………んっ…………んっ…………んっ…………
…すっごい…先っぽが真っ赤」

星子 「こんなに硬くなって、痛かったりしないの？ ……
…へえ、そういうものなんだ」

星子 「先っぽ？ こっちのほうがいいの？ さ、触っていいの？」

星子 「優しく？ 優しくね。 ……じゃあ、今度は…
…先っぽを優しく……………」

星子 「あゝゝっ、こっちはちよっとプニプニしてる感じなんだ」

星子 「んっ？ 今の触り方がいいの？ こう…………撫でる感じ
じみたいなの？ ……なでなでゝゝ」

星子 「へゝゝっ、そんなに気持ちいいんだ？ ……
ちよっと面白い」

星子 「なでなでゝゝなでなでゝゝなでなでゝゝ……………
おーおーっ、すっごいビクビクしてる。そんなにいいんだ？」

星子 「そっかそっか。ここを刺激すればいいんだ？ それ
なら…………口でする時もおんなじなのかな？」

星子 「試してみた方が早いかな…………じゃ、そろそろリクエスト
されてた…………口で、いいかな？」

星子 「上手くできるかどうかわからないから、痛かったりしたら言ってね」

星子 「あ……………むうつ……………んん、うつ……………んうつ、ふ、太い……………」

星子 「口の中に、入れると……………んぶ、むっ……………改めて、大きさが……………むぐっ、わかるね」

星子 「ん、んぶっ……………れろっ、れろっ、んんうつ……………おちんちんの、先っぽ……………舐める、みたいに、れろっ……………すればいいのかな？」

星子 「ちゅぶっ……………ちゅぶちゅぶっ……………ん、れろおゝゝっ、れろれろっ、れろっ……………こういうの、どう？」

星子 「ちゅぶぶっ、気持ち、いい？ ん、んつぶ……………ちゅぶっ、う、れろっ、んん、すごい、味……………」

星子 「んっ？ んゝゝっ、どう言えればいいのかなあ。こう……………ちよっとしよっぱいような……………でも、嫌いじゃない味」

星子 「れろっ、れろっ……………あとは、頭を……………んぐっ、んぐっ……………こうやって、動かせば……………んんっ、いいんだよね？」

星子

「ん、まあ……ちょっとは聞いたことあるし……んぐっ、うっ……これでもいいのかどうかは……れろろっ、わかんないんだけど……」

星子

「んぷっ、んぷっ、うっ……ずっぶ、う、ぢゅぶっ……ん、ん、んんうっ……!」

星子

「う、こほっ……こほこほっ……喉に、当たっちゃった」

星子

「ん、れぶっ、う、ぢゅぶっ……んぐっ、んぐうっ、う、うっぶ……んんっ?　なんか、出てきたみたい」

星子

「れろおっっ、ん、んぶぶぶっ……ぬるぬるしたのが……出てる?」

星子

「へえ……んっぶ、気持ち良くなると……出るんだ?　ぢゅっぶ、ぢゅっぶ、初めて、知った、れろっ……」

星子

「んんっ……ふ、ふふっ、変な味……えっと、なんだっけ?　んぐ、う……ガマン汁?　ぢゅぶっ……けっこー……変な味する」

星子

「えっとね……れろれろっ、濃い味っていうか……ぢゅっぶ……塩気があって、あとちよっと苦いかな」

星子

「れろっ、れろれろっ、ん、ぶっ……ぢゅっぶ、
ぢゅっぶ、う、ううっ、ん……むぐ、う、んん
んっ……!」

星子

「ぢゅぶるっ、ん、んん、う、ずっ……ずずっ……
吸ったりしたら、れぶっ、どう、かな?」

星子

「気持ちいい? じゃあ……ずぢゅっ、ぢゆるるっ、
もっと強く、ぢゆるるるっ、吸ってみるね」

星子

「んぐ、う、ふっ……ぢゅっぶ、ぢゆるっ、ぢゆる
るっ、う、んんんっ……ぢゆるるるるるる
るっ……!」

星子

「んんうっ……おちんちん、んうっ……すっ!いい、震
えてる……れろっ、気持ち、いい?」

星子

「ん、んぶっ!? う、こほっ……今、ちよつと腰
振ったでしょ? ぢゅっ、それは、ちよつとなし
ね。喉に当たると苦しいから」

星子

「このままじっとしてて……れろっ、れろおろっ、
精一杯、頑張るから……ちゅぶっ」

星子

「ん、んんうっ、ぶ……んぐっ、んぐっ、すっ!……
熱い……んんっ、おちんちん、れろっ、最初の時よ
り、れろっ、硬くなってる、気がする」

星子 「んっ……んうっ……パンパンに、膨らんで……ちゅぶるっ、破裂しそう、だよ……んぐっ、んぐうっ、うっぶ……」

星子 「このまましてたら、んっ、んっぶ……むぐう、うぶっ、ず……ちゅぶるるっ、最後まで、いけ、そ？」

星子 「んぐっ、んぐっ、うっ、っていうか、んんっ、すっごいビクビクして……んちゅうっ、もしかして、ん、んうっ……出そうに、なってる？」

星子 「ず、ず……ちゅうううっ……出るなら、んんっ……このまま、ちゅぶっ、出してもいいからね」

星子 「んぐ、うっ……むぐうっ……受け止めて、ん、ぐ、ぐうっ……あげる……んぐっ、んぐっ、んぐうっ……」

星子 「ん、ふっ……ふうーっ、う、うむ、う、んんっ……ちゅぶるっ、ずぶっ……ん、ぐ、ぐうっ……むぐう、ん、んんんっ……」

星子 「出して、んぐ、う、出していいから、んぐっ、んぐんぐ、う、むっ、気持ち良く、なっ、ず、ぶっ……ちゅむうっ……」

星子

「んぐっ、んぐんぐんぐっ、う、ううつ、んぐう、
む、ぶう、ん、ん、んんんううつ、ず、ずちゅ
るっ……ぢゆるっ、ぢゆるるるるるるるるる
るっ……！！！！！！」

星子

「んッッ！！？ ん、んんうううううッ！！ う、う
うつ、ん……んんううつ……！！」

星子

「んぐ……うつ……ず、ずずっ……ん、
「くっ……」くっ……「くっ、」くっ、」
くっ、「くっ、」くっ……！！」

星子

「ぶはっ！ は、はあうううッ、す、すごかったあ
うう」

星子

「うつ……けほっ……こほっ、こほっ……につがあ
い……けほけほっ……すっこい味……」

星子

「んううううううッ、喉に絡みつくうううッ……
こほっ……ううつ、すぐには取れないかも……」

星子

「んっ？ うん、飲んだよ。自分でもできると思わな
かったけど」

星子

「んううッ、別に嫌じゃ……なかったかな。……無理
してるわけじゃなくて……そうしてあげたいって
思ったから」

星子

「うん、大丈夫。喉の調子も……んんっ、元に
戻って来たから」

星子 「それで？ どんな感じだったの？ 気持ち良かった？」

星子 「……そっか。良かったあ。ちゃんとできるか不安だったし」

星子 「あ、いえいえ、お礼を言われるようなことでは……」

星子 「……で、これで終わりにはしない、でしょ？ ……
……そうだよ。これからもんね」

星子 「すぐにできるなら……いいよ。まだ……時間はある
と思うから……ゆっくり、しよ」

星子 「って……わっ、なんでまだそんなに元気なの？
今、出したばかりなのに……」

星子 「おちんちんって、そういうものなの？ へええ
っ……」

星子 「じゃあ……今度は一緒に……ひとつに、なろう
か……」

★トラック5…星降る町の片隅で私達はひとつになった

星子 「……う、かな？ こんなふうに寝てればいいのかな？
……大丈夫そう？」

星子 「ん……ふふっ、はっずかし……こんな格好……
……全部見えちゃってるよね」

星子 「はるるっ、体が熱くて溶けそう……心臓、もうドキドキしっぱなし……」

星子 「君は……？ やっぱドキドキしてるの？ ……そうなんだね。 ……ふふっ、私だけじゃなくて良かった」

星子 「えっと……私はこのまま、で、いいのかな？ あとは任せていい？」

星子 「うん……じゃあ、よろしく……いつでも……君のタイミングでいいから」

星子 「……でも、それ……本当に入るのかな？ お、大きいよね……」

星子 「あ、あはは、ちょっと怖くなってきちゃった」

星子 「やっぱりねえ……そんなすごい、入る気がしないし……入るんだろうけど……」

星子 「ちゃんとできるのかなって思っちゃったりするよね」

星子 「……まっ、こんなこと言っても始まらないか。ごめんね、変な事言って。 ……本当に、できる時でいいから」

星子 「うん……もうできるなら……きて……えっとね
……あ、そこから上……そう……あ、
行きすぎ」

星子 「もうちょっと下かな……あ、そこ……う
ん、そこだよ……そこに、こう、穴があるか
ら」

星子 「そのまま、押し込んでみて……あっ、ゆっくり
ね！」

星子 「んっ……ううっ……あ、もう痛い……
えっと……ゆっくり、少しずつ……してもらえると
嬉しいかな」

星子 「んうっ……んうっ……んうっ……う、
うううっ……あ、きてる……入ってきてる……
…」

星子 「うん……ちよつとずつ……入ってきてるよ……ん
んっ……うーっ、痛い……入口でもこん
なに、んんっ……痛むんだ」

星子 「あ、でも大丈夫。まだ、我慢できないほどじゃない
から」

星子 「んうっ……んんんっ……そのまま……うくっ……
ゆっくりと……うっ、きて……んっく……
…」

星子 「うう、ふっ、く……んんうっ……！ い、づう……
だ、だい、じょうぶ……ぐうっ……！」

星子 「は、入りづらかったら、んぐっ……ち、ちよっと、
力入れて……う、ぐっ……押し込んで、みて、いい
から……」

星子 「ふうっ……ふううっ……ん、く、ううっ……んん
んううっ……ん、ぐうううっ……！」

星子 「いッ……う、づうッ……う、ぐ、んんッ……い
ッ、だあ、ああああ、ううううっ、い、いいか
らっ、あ、やめないで！ その、ままつ……っ、続
けて……！」

星子 「ん、んっ……んんんううう——ッ——」

星子 「ふはっ……！？ あ、はっ……はあっ……は
あああっ……」

星子 「入った……？ これ、入ってるよね？ ああ……
すっ」……なんか、わかる……入ってるのが
……」

星子 「あ、ちょっと動かないでね……ごめんね……今は……
……股のところが、痺れてるみたいな感じがして……
……」

星子 「はーはーっ………これで、処女じゃなくなったんだあ」

星子 「へ、へへっ……痛いんだけど……ちよっと嬉しかったり……」

星子 「あ、そっちもだよ。初めてだったんでしょ？ 童貞卒業おめでとー！」

星子 「ぶっ……あははっ、なんか、すっごく痛いのに笑うしかなくなってきた。こんなふうになるんだって感じで」

星子 「すごいよね。本当に入っちゃうんだもん。こう……ひとつになってる感が半端ないっていうか……繋がってるんだって思っちゃう」

星子 「……あっ、今、動いた？ おちんちん、ビクッてした気がする」

星子 「あ、やっぱり？ わかるわかる。………あ、また動いてる。……へえっ、そんなふうに動かせるんだ」

星子 「こっち？ ちよつとなら動かせるよ。えっとね………今、きゅって締め付けてるけど……」

星子 「わかる？ じゃあ、こういう感じは？ きゅっきゅっきゅって………あははっ、わかる？ うん、このくらいは動くよ」

星子 「ぷっ、ぷははっ、何やってんだろうね。こんなどう
でもいいこと……あははっ……」

星子 「ん……ちよつと痛みに慣れてきたかな。ゆっくり
だったら動いても大丈夫かも……」

星子 「うん……いいよ……動いてみて……」

星子 「んふ、あっ……あ、はっ……ふう、あっ……
……ああ、んっ、あっ……くあ、ん、ううっ……
……！」

星子 「う、ううっ……痛い、けど……ん、んうっ、……
……思ったより、だ、大丈夫、みたい」

星子 「そのまま、あ、んあっ……っ、続けて……んっ、
んうっ……ふ、あっ……」

星子 「んっ……んうっ……く、ふっ……これが、あ、セッ
クス、なんだ、あ……んあっ……今……セック
ス、してるんだね」

星子 「はあっ……はああっ……あ、あ、あああっ……中
が、ぬるぬるして……ん、ちよつと、滑りが、あ、
ふっ……良くなって、きたね」

星子 「んんんうっ……そのくらいのスピード、でも……
く、ふっ……大丈夫、う……ふあっ……！」

星子 「ん、あっ、ああ、んっ、あんっ、う……んっ、
んっ、んんん、う、くっ……んくっ、んくうっ……
う、う、うっ……！」

星子 「んうっ、だ、大丈夫……んくっ、あと……ち、
ちよっとだけ……んふ、うっ……気持ち良く、なっ
てきたかも……」

星子 「ふあ、う……こ、擦れたところ、熱くて……んく、
あっ……じ、自分でも、よく……わかん、ない」

星子 「んあっ！？ ああっ、い、今は……あ、大丈夫、
い、痛かったんじゃなくて……んっ、んんっ、し、
下から、突き上げられる感じが……んんっ、き、気
持ち、良かったかも……」

星子 「んうっ……！ そ、そう……そんな感じ……
んうっ、うっ……んっ、んっ、んっ、ふ、ううっ……
……！」

星子 「いい、よ、あっ……そのくらい、速くても……ん
あっ、あんまり、い、痛くない……！」

星子 「はあっ、はああっ、っていうか、これ……」の、音
……えっ？ わ、私なの？ んあっ、私の、濡れて
……んあっ、その、音……？」

星子 「や、だっ、はずかし……ふあっ、こんな、あ、ん
んっ、濡れたこと、ないよ……ふあっ……ふあ、
あ、あああっ……！」

星子

「自分で……んっ、ふあっ、自分の体に、び、びっくりしてる……あははっ……んふあっ、はあっ、あ……あ、あ、あっ……！」

星子

「ねっ……今ね……んん、うっ、し、幸せ、だよ……んあっ、こ、こんなふうに、ん、んうっ、君と……好きな人と、あっ、ひ、ひとつに、なれて……すぐう、うあっ、幸せ……！」

星子

「本当は、あ、んっ、もっと……もっといっぱい、あ、んんっ、い、いろんなこと、したかったけど……でも……あっ、ああっ、こんなふうに、なれて……あんっ、良かった……ああっ、ふあああっ………！」

星子

「最後まで、ん、あっ、してね……ん、んうっ……このまま、あ、最後までして、ほし、い……あふっ、ん、あああっ！」

星子

「うん……ふ、ふふっ、中でって、意味……あ、んうっ……本当はね、あ、できちゃう日、なんだけど……んく、うっ……中で、ん、うっ、出しているよ」

星子

「そっ、中で出したら……んうっ、で、できちゃうかも、しれ、ないけど……んんっ、ん、あっ、ふふっ、もしも……もしもだけど……ん、あっ、できちゃったら……ふ、あっ、一緒に、そ、育ててくれる？」

星子

「んはっ、あっ、け、結婚？　ぷはっ、えっ、結婚するの？　今日？　あははっ、え、ええっ、あんっ、エッチ、しながら、あ、あっ、それ、プロポーズ？」

星子

「あははっ、あ、ああっ、ん、ありが、と、あんっ、うれしい、ふ、あっ、うん、い、いいよ……結婚、しょ」

星子

「付き合ったその日、だけど……あ、んんっ、隕石が、落ちて、ん、んんっ、こなかったら、あ、はあっ……結婚、しちゃおっか」

星子

「あ、ああっ、ふ、んはあっ、いいねえ、そ、そういうの、ん、あっ……結婚して、んあっ、こ、子供ができて……ん、んんうっ、新しい、か、家族で暮らせたら、あ……いいよねえ」

星子

「じゃあ……あ、んあっ、いっぱい……あ、んんうっ、わ、私の中で……いっぱい、出して……ん、あうっ、奥の、ほうに……あ、んっ、んんっ、ふ、あっ、はあっ、あ、あ、あっ、あああっ、ああああっ……！！」

星子

「んあっ！　あああっ、んっ！　す、ごい、あっ、強い、けど……あ、はあっ、大丈夫っ、う、い、痛くない、から……はあっ、し、痺れた感じで、もう……い、痛みとか、あ、よく、わかんないから……！！」

星子

「ああ、きてっ、ふあっ、あ、きてえっ……あ、ふっ、ううっ、んあっ、は、あっ、ん、ああっ、あっ……んあっ、あああっ、ひ、ああんっ、あ、あ、ああっ、あああっ、は、あ、はあああっ、く、う、うあっ、ああっ、ん、はあっ、ああああっ、あああああああっ、あああああああああああああああっ……！」

星子

「あッッ………！！　あ、あ………あああああゝゝゝゝっ………！！」

星子

「はあっ………はあっ………はあっ………ビクビク、してる………」

星子

「イってる、の？　今……出してるの？　………うん、自分だとよくわかんなくて………」

星子

「そっかあ……ちゃんと………できたんだ………良かった」

星子

「………あ、まだ動いてるね。………まだ、出るの？　あとちょっと？　へえゝ……意外と長いんだ？」

星子

「うん……焦らなくて、いいから………ゆっくりとでいいから………全部………出していいよ………」

星子

「焦らなくても………ふふっ、どこにもいかないし………」

星子 「うん、どこにもいかない……最後、まで……」
ここにいても、いいよね？」

★トラック6…起きたら……

星子 「そっち、大丈夫？ 寒くない？ ……………ふふっ、
このまま寝たら、布団汚しちゃうね」

星子 「うん、いいよね。後で……………後でが あったら、洗
えばいいんだし……」

星子 「は……っ、あははあ……………疲れたあ……………こんな
に疲れるんだね」

星子 「でしょ？ そっちはずっと動いてたんだもんね。私
より疲れてるよね」

星子 「うん、休も……………あとはここで……………ん、ふあ……
……………あくび出ちゃった」

星子 「布団気持ちいい……………このまま寝ちゃうかも……
……………」

星子 「んっ……………頭……………撫でてくれるの？ ふふっ……………子供
になったみたい」

星子 「ううん、嫌じゃないよ。嬉しいし……………すぐ、安心
する」

星子 「うん、もつとしてほしい……………もつとなでなでしてく
れると……………このまま安心して眠っちゃいそう」

星子 「……………このまま寝ちゃったら……………幸せなまま、終われるのかな」

星子 「でも、もっと話したいこともあるし、それができないのはもったいない気もするよね」

星子 「んっ？ 起きたらまた話をすればいい？ でも、もう起きれるかどうか……………ううん、そうかもね……………起きたら、また話をすればいいんだよ
ね」

星子 「……………あと、どのくらいなんだろ。もう……………2時間……………はないよね？」

星子 「ま……………いつか。どこまで正しい情報なのかなんてわかんないし……………」

星子 「それよりも……………あふ……………本当に寝ちやいそうだから……………ぎゅって抱き締めててくれる？」

星子 「なでなでしてくれるのもいいんだけど、ぎゅってしてくれたら……………もっと安心して眠れそう」

星子 「（囁き）ん……………ありがと」

星子 「（囁き）私ね……………ふふっ、好きになったのが……………君で良かった……………」

星子 「……………（囁き）ああ……………だめだ、ほんとに寝ちやいそう……………気持ちよすぎて……………」

星子 「（囁き） うん……起きたらまた……いろんなこと話そうね」

星子 「（囁き） 私ね……君に聞いてもらいたいこと、いーっぱいあるから……いろんなこと話して……それから……いろんなこと聞かせてね」

星子 「（囁き） だから……その時まで…………
……おやすみなさい」
